

天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて

解説シート 2

【第二室】天平びとの声を掘る

展示期間 I 二〇一〇年 九月二十五日(土)―十月一日(月)

II 一〇月三日(水)―一〇月五日(月)

III 一〇月二十七日(水)―十一月七日(日)

a 内裏北外郭出土木簡

9 平城宮内を守る兵衛たちの名前の記された木簡2

(SK八二〇出土、『平城宮木簡』一、九二)

(表)西宮東一門 室 「矢田部 勝 右七人
川上 茨田 館

(裏)二 檢前 「錦部 「漆部 合六人
三野 土師 尾張

長さ一〇六mm・幅二八mm・厚さ三mm 〇一型式

「西宮東一門」は東面南端の門と考えられる。この門は七名で守った(ただし書かれているのは六名)。裏面には「二」と書かれているから「西宮東二門」のことで、東面中央の門のことであろう。こちらも六人で守っている。

10 衣入れの櫃の付札 (SK八二〇出土、『平城宮木簡』一、四八〇)

緑縫衣入櫃一合

長さ一五二mm・幅二二mm・厚さ七mm 〇三型式

11 近江国からの米の荷札

(SK八二〇出土、『平城宮木簡』一、四二二。『平城宮発掘調査出土木簡概報』三八、二三頁下段。以下、城38―23下のように略記する)

(表)近江国高嶋木津道守臣大父万呂

(裏) 白米

長さ(二二六)mm・幅二四mm・厚さ三mm 〇五一型式

近江国高嶋郡木津郷から送られてきた白米の荷札。郡や郷の文字、そして白米の量が省略されている点で珍しい荷札である。上端を尖らせるのは近江国の米荷札の特徴である。

12 三河国からのサメの荷札2

(SK八二〇出土、『平城宮木簡』一、三六六)

参河国播豆郡篠嶋海部供奉五月料御餐佐米楚割□斤

長さ二六七mm・幅二六mm・厚さ四mm 〇三二型式

参河国播豆郡篠嶋(愛知県篠島)から送られてきた佐米の荷札。

楚制は魚肉を細く割いて干したものだ。三河湾に浮かぶ島々は月交替で都に海産物を送っていた。篠嶋は奇数月に貢進している。

製造酒司出土木簡

23 尾張国(?)からの赤米の荷札

(SD三〇三・五出土)『平城宮木簡』二、二二五(三)

山田郡建侶酒部枚夫赤米

長さ二六九mm・幅二〇mm・厚さ五mm ○三二型式

山田郡は、伊賀・尾張・上野・讃岐各国にあるが、米の貢進国で、かつ赤米の類例がある国としては、尾張国山田郡(今の名古屋市東部・尾張旭市・瀬戸市などの丘陵地帯)が相応しい。同じ遺構から、尾張国中嶋郡の酒米の荷札が見つかったことも、その傍証となる。郷名記載の位置に書かれた建侶は不詳。酒部枚夫は貢進者の名。

24 備中国(?)からの酒米の荷札

(SD三〇三・五出土)『平城宮木簡』二、二二六(四)

八弁郷春御酒米五斗

長さ一九五mm・幅二mm・厚さ六mm ○三二型式

八弁郷には複数の候補があるが、米の貢進国としては、備中国賀夜郡八部郷(今の岡山県総社市)が相応しいか。春御酒米は御酒(天皇用の酒)を醸造するための春米(精白した米)の意。

25 酒ガメの付札

(SD三〇三・五出土)『平城宮木簡』二、二二三(〇)

二条六畝三石五斗九升

長さ二三五mm・幅四mm・厚さ六mm ○三二型式

二条六は、多量の畝(カメ)を整然と並べた縦横の位置関係を示すもので、二列めの六番めの畝をさす。三石五斗九升は、今

の約一石四斗三升六合、二六〇リットル。中味が何かは書かれていないが、水と明記するものがあるので、明記のないこの付札は、酒ガメのものとみられる。かなり的大ガメである。水を入れた三条七畝の付札もあるので、同じ場所のものとするれば、少なくとも二十一個の大ガメが整然と並んでいたようである。

26 清酒の付札

(SD三〇三・五出土)『平城宮木簡』二、二二九(九)

清酒中

長さ一五四mm・幅二二mm・厚さ四mm ○三二型式

清酒は濁酒に対する言葉で、澄んだ酒の意。中は酒の等級を示すものか。容量は書かれていないので、長期保管のためのものではなく、醸造過程における一時的保管用のラベルか。

27 造酒司の呼び出し状

(SD三〇三・五出土)『平城宮木簡』二、二三四(四)

(表)造酒司符

長等

犬甘名事

日置菜

若湯坐少録

(裏)直者言従給状知必番日向□

長さ二五〇mm・幅三八mm・厚さ三mm ○一九型式

造酒司が、若湯坐少録・犬甘名事・日置菜の三人を呼び出している。下端が欠けており、呼び出し理由は判然としない。裏面の木簡末尾は、語順がやや整わないが、当番の割り当て通りに出勤するように、と結ばれている。呼び出しを受けた当人が、この木簡を造酒司に持参して廃棄したものと考えられている。長は裏面の記載からみると、当番ごとの長をいう。ここでは衛府の百人単位の統率者を指す可能性もあるが、酒造りに携わった酒部の統率者とみるのが穏当かも知れない。

天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて

解説シート 3

【第二室】天平びとの声を掘る

展示期間

I 二〇一〇年 九月二十五日(土)―十月一日(月)

II 十月三日(水)―十月五日(月)

III 十月二十七日(水)―十一月七日(日)

C式部省関連出土木簡

37 大学寮の宿直報告²

(SD四一〇〇出土、『平城宮木簡』四、三七五三)

大学寮解 申宿直官人事 直講正八位上濃宜公水通
天平寶字八年□月十一日

〔九カ〕

長さ二四一■・幅三三■・厚さ三■ ○一型式

大学寮は上級官司の式部省に対し、宿直担当者を報告した木簡。大学寮は、役人の養成機関である大学を管轄する役所。京内の左京三条一坊(または右京三条一坊)にあったと考えられる。宿直は、夜勤(Ⅱ宿)と日勤(Ⅲ直)の総称。直講は、大学博士・助教を補佐するために七三〇年(天平二)に四人が置かれた令外官。濃宜水通は後に大学少允(第三等官)に昇進後、信濃介に転出したことが知られている。

天平寶字八年は七六四年。九月十一日は藤原仲麻呂の乱が勃発し、駅鈴と内印をめぐる争奪戦があった当日である。そうした緊張した政情を背景に考えると、この木簡もまた違った側面が見えてくることであろう。

38 勤務評定木簡の削屑⁷

(SD四一〇〇出土、『平城宮木簡』五、六六三七)

河内国交野郡

○九一型式

役人の勤務評定は、考という毎年の評価と、選という数年分の考の積み重ねに基づく位階昇進の二段階で構成される。いずれも役人の個人カードの木簡を基礎資料とした。これを考選木簡と呼ぶ。考選木簡は側面にあけられた孔に紐を通して順番を固定して保管され、評価が終了すると、何度も削り直して再利用された。このため、多量の削屑が生まれる。考の木簡と選の木簡とは内容が少し異なるが、役人の官職・位階・姓名の下に、年令と本貫地(本籍地)を二行に割り書きする書式は同じである。

この削屑には、人名の末尾と、その下の割書きのうち左行の本貫地記載部分のみが残る。

39 勤務評定木簡の削屑⁸

(SD四一〇〇出土、『平城宮木簡』五、七〇八二)

留省少初位

○九一型式

勤務評定木簡の身分と位階の部分の削屑である。留省は、留省資人のことで、本主が死亡したりして所屬がなくなり、式部省付きになっている資人（五位以上の諸王・諸臣、大臣・大納言などに与えられる従者）をいう。

40 勤務評定木簡の削屑9

（SD四一〇〇出土。『平城宮木簡』五、六二七〇）

能登国羽咋郡人

今□□
〔授力〕

〇九一型式

左辺は木簡の原形をとめている。割書左行の本貫地部分と、評定に基づく叙位の結果を書き加えた部分が残る。奈良時代の下級役人は、地方に本籍地を残したまま、都の勤務に就くものが多かった。

d 長屋王家木簡

53 木上の所領から届けられた焼米などの送り状

（SD四七五〇出土。『平城京木簡』一、一八八）

木上 進 焼米二匁 阿支比 右三種 稻末呂 八月八日忍海安万呂〇

長さ二一〇mm・幅三九mm・厚さ二mm 〇一一型式

焼米・アケビ・ナツメらとともに、木上（現在の奈良県磯原市周辺）の所領から送られてきた木簡。木上は長屋王の父高市皇子のゆかりの地である。忍海安万呂は木上所領にいた管理人で、稻末呂が長屋王邸にこれらのものを届けたのであろう。

54 片岡の所領からのカブラの送り状2

（SD四七五〇出土。『平城京木簡』一、一七七）

（表）片岡進上著三斛束四尺束 駄 〇

（裏）檢前連 十月十四日 真人 白田古人 〇

長さ二二三mm・幅三三mm・厚さ二mm 〇一一型式

片岡からカブラを進上した際の送り状。三斛（石）は今の一石二斗、約二六リットル。片岡は今の奈良県王寺町・香芝市周辺。

大和川が大阪平野に抜ける竜田越えに隣接する、交通の要衝でもあった。四尺の長さのものを一束にしていた。馬二匹に分けて運ぶほどなので、けっこうな分量であることがわかる。片岡からの送り状は、カブラが多数を占め、カブラが名産だったようだ。下端には木簡を束ねるための孔がある。

55 周防国からの塩の荷札2

（SD四七五〇出土。城21-33上）

周防国大嶋郡屋代里田部兼御調塩三斗

長さ二七〇mm・幅三五mm・厚さ六mm 〇三三型式

周防国大嶋郡屋代里（山口県周防大島）から送られてきた調の塩三斗の荷札。三斗は現在の約一斗二升、約二一・六リットル。周防大島に長屋王の経済基盤があったことを物語る。

56 長屋王邸で馬を管理する人への米の支給木簡2

（SD四七五〇出土。城21-21上）

（表）馬司大末呂米二升 〇

（裏）受 八月十二日 甥万呂 〇

長さ一九五mm・幅三五mm・厚さ四mm 〇一一型式

馬司に勤務する大末呂という人物に米を支給したときの木簡。

二升は現在の約八合、約一・四リットル。馬司は長屋王邸内で馬を管轄する部署。当時の馬は大切な武力であった。下端の孔は、この支給を証明するものとして束ねて保管しておくためのものと考えられている。

57 長屋王邸に仕える青少年への米の支給木簡2

(SD四七五〇出土。城21-19上)

(表) 小子十六口米一斗六升尼二口米五升薪三荷直 〇

(裏) 米九升右米三斗 十二月六日廣嶋 〇

長さ二九六■・幅二七■・厚さ二■ 〇一型式

小子十六人分の支給量一斗六升、尼二人分の支給量五升、及び薪三荷を買うための九升、合計三斗を支給したときの木簡。長屋王邸で小子(青少年)や尼が活動していたことを物語る。小子には一人一升ずつ、尼には二升五合ずつの支給である。三斗は今の約一・二斗、二一・六リットル。

58 御所への米の支給木簡

(SD四七五〇出土。城21-13上)

内御所進綾粉米一升 受多々女
七日古末呂 〇

長さ一五三■・幅三〇■・厚さ二■ 〇八一型式

御所(長屋王の御所か)に進上する米一升を支給したときの木簡。多々女がその米を受け取った。綾粉米は不詳だが、一升は今の約四合、約〇・七リットル。

59 竹野王子への米の支給木簡

(SD四七五〇出土。『平城京木簡』二、一八二八)

(表) 竹野王子進米一升大津 八月三日 甥万呂 〇

家令□

(裏) 吉佐良十口 □

長さ二三〇■・幅二五■・厚さ三■ 〇一型式

竹野王子に対して、米一升を支給したときの木簡。受け取ったのは大津という人物で、支給したのは甥万呂と長屋王家の家令であった。竹野王子は竹野女王で、長屋王の近親者とみられるが系譜関係は未詳。奈良県明日香村龍福寺に現存する石塔に「天平勝宝三年歳次辛卯四月廿四日庚子從二位竹野王」の銘が刻まれており、同一人物と考えられる。裏の「吉佐良(よい皿)十口」は以前の木簡の消し残しか。

60 長屋王の妻の御所の名が書かれた木簡

(SD四七五〇出土。城21-17上)

(表) 西宮 犬田部劍 工倭文猪

茨田安比等

(裏) □ □

長さ二二三■・幅二五■・厚さ四■ 〇一型式

長屋王の妻の居所であった西宮の名が記された木簡。長屋王家木簡で西宮と書かれた木簡のうち、人名だけが記されたのはこの木簡のみで、他は米の支給木簡である。用途はわからないが、あるいは西宮を守る人々の名前が記された木簡か。

75 e 二条大路木簡

岡本宅からの瓜の進上状2

(SD五三〇〇出土。『平城京木簡』三、四五四三)

(表)岡本宅 進上瓜拾伍顆
(裏) 七月廿一日 田辺久世万呂

長さ一七七■・幅二五■・厚さ六■ ○一型式

岡本宅から瓜を進上する木簡の一点。七三六年(天平八)のものとみられる。顆は丸いものを数える単位。岡本宅は、正倉院文書にもみえる藤原氏の京外の拠点で、瓜のほか、栗やササガを進上した木簡もある。正倉院文書には、同じ年に皇后宮職の写経所との間で經典の貸し借りをした記録がある。場所は正確には不明ながら、飛鳥地域が有力である。

76 三河国からのサメの贅の荷札4 (SD五一〇〇出土。城22-21下)

参河国播磨郡析嶋海部供奉八月料御贅佐米楚割六斤

長さ二四〇■・幅二■・厚さ五■ ○二型式

参河国播磨郡析嶋(みかわの)から送られてきた佐米(さめ)の荷札。楚割(すわり)は魚肉を細く割いて干したものだ。三河湾に浮かぶ島々は月交替で都に海産物を送っていた。おおむね析嶋が偶数月、篠嶋が奇数月を担当した。六斤は重さを示し、今の約四キログラムにあたる。

77 藤原麻呂邸の勤務分担の記録2

(SD五三〇〇出土。『平城京木簡』三、四五六三)

宿直資人合二人 大原東万呂 六月三日大原「東万呂」0

佐味梶取

長さ二七九■・幅四一■・厚さ五■ ○一型式

藤原麻呂邸の宿直(宿が夜勤、直が日勤)を担当した資人(しじん)を書き上げた木簡。資人は臣下に与えられる従者のこと。

78 近江国坂田郡上坂田郷からの庸米の荷札4

(SD五三〇〇出土。『平城京木簡』三、四九〇〇)

(表)坂田郡上坂郷有羅里戸主坂田老戸
(裏)庸米三斗

長さ一三〇■・幅一七■・厚さ三■ ○五一型式

78から80までの三点は、近江国坂田郡上坂田郷(さかた)からの庸米(ようまい)の荷札。上坂(田)郷は現在の滋賀県長浜市東上坂町(さかた)西上坂町(さかた)付近。六斗は今の二斗四升、米約三六キログラム。坂田老(さかた)比流酒人(ひりゅうしゅにん)蔵田虫麻呂(むしあそ)は庸米の貢進者。なお、庸米は普通は六斗単位で貢進する。78は三斗とあるが、二人分合成した事例もあるので、そういう事情かと考えられる。裏面下半が削り取られたようになっているのも、これと関係する可能性がある。

上坂田郷には藤原麻呂の経済基盤の一種、封戸(ほうこ)が存在した可能性が高い。封戸は、位階や官職に応じて五十戸(ごじゅう)単位で与えられる給与の一種で、田租の半分と調・庸全部が封主に支給される。

79 近江国坂田郡上坂田郷からの庸米の荷札5

(SD五三〇〇出土。『平城京木簡』三、四九一四)

(表)近江国坂田郡上坂郷戸主

(裏)比流酒人戸庸六斗

長さ一四九■・幅二■・厚さ三■ ○五一型式

80 近江国坂田郡上坂田郷からの庸米の荷札6

(SD五三〇〇出土。『平城京木簡』三、四九二五)

(郷脱力)

(表)近江国坂田郡上坂田戸主数田公虫麻呂

(裏)米六斗

長さ二〇六■・幅二七■・厚さ五■ ○〇三型式

天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて

解説シート 4

【第二室】天平びとの声を掘る

展示期間 I 二〇一〇年 九月二十五日(土)―十月一日(月)

II 一〇月三日(水)―一〇月五日(月)

III 一〇月二十七日(水)―十一月七日(日)

f さまざまな木簡

98 山背の所領の稲刈りと稲の収納場所に関する木簡

(SD四七五〇出土、『平城京木簡』一、一六〇)

(表) 〇移務所

山背御田芸人功卅六常 田菊人功

(裏) 〇

扶 従広足

長さ二四〇mm・幅二〇〇mm・厚さ三mm 〇一型式

京外にあった、高市皇子の財産を継承する家政機関から長屋王邸に送られた文書木簡。左側が欠けているので詳細は分からないが、山背御田(大阪府河南町山城)の草刈りをした人に払う工賃三六常(布か)や稲を刈る工賃を長屋王邸に対して請求した内容と考えられる。扶や従はその家政機関の役職名。

99 山背の所領からのチシヤなどの送り状

(SD四七五〇出土、『平城京木簡』一、一九四)

(表) 山背園司解進上

「知佐五束 右四種持人 〇」

(裏) 奴稻万呂 和銅五年十一月八日国足 〇

長さ三五〇mm・幅三八mm・厚さ三mm 〇三型式

山背の所領から、知佐・大根・古自(コリアンダーか)など四種類の野菜を長屋王邸に持ってきた時の送り状。持ってきたのは奴の稲万呂で、山背の所領の担当者が国足。和銅五年は七十二年。

100 長屋王邸出土のまじないに関する木簡

(SD四七五〇出土、『平城京木簡』一、一六一)

(表) 〇移 政所 各兄麻呂之服用糸十五絢布十五常

「遣北御倉鑑一勾蔵鑑一塩殿鑑」

〇一勾右三

(裏) 〇右系布者若翁御物交易糸布用又米交易数記進

〇上 附日下道万呂

九月五日棕石角

長さ二〇四mm・幅二六mm・厚さ五mm 〇一型式

糸や布について書かれた文書木簡。各兄麻呂がまじないに使う

糸と布は、若^{わか}鋤^くのものを交易することによって得たものを用いよ、そして、交易した米の量を記して進上せよ、という意味と考えられる。別筆部分はこの文書木簡を受けた人物が先述の糸や布、米などを保管している蔵などの鍵について指示したものである。なお、各兄麻呂は、(七〇一年(大宝一))に技能を活かすために僧慧羅から国によって還俗させられた恵麻呂のこと。七一八年(養老二)には陰陽博士で四三歳であったことが知られ、後に丹後守になったが、法を犯して流罪になっている。

101 長屋王邸が医者を呼び出した木簡

(SD四七五〇出土。『平城京木簡』一、一四七)

(表) 召医許母矣進出急々

(裏) 五月九日 家令 家扶

長さ二六八mm・幅四二mm・厚さ五mm ○一型式

「符」という下達文書の形式をとる召文。家政機関の職員がその命令主体であることが明記されている。「矣」は、助詞の「を」を一字一音で表記したもの。万葉仮名を用いて助詞をあらわすとき、本文と同じ大きな文字で記す場合と本文よりも小さな文字で記す場合とがあり、ここでは前者。「許母」は、七一一年に医術に優れた者の一人として褒賞された渡来系の医師「太羊甲^{たいうけ}許母^{きぼ}」のこと。『続日本紀』養老五年正月甲戌条。七二四年には城上連に改姓されている(同神亀元年五月辛未条)。

102 出雲臣安麻呂の勤務評定木簡

(SD四七五〇出土。『平城京木簡』二、二〇八五)

〔无カ〕 年廿九

□位出雲臣安麻呂 山背国乙当郡 上日 日三百廿 夕百八十五

Ⅱ「并五百五」

長さ二六二mm・幅三二mm・厚さ六mm ○一五型式

出雲臣安麻呂の勤務評定木簡。一年の勤務日(上日)が記されている。彼は二十九歳で山背国愛宕郡(現在の京都市東北部)出身。一年に午前中三〇日、午後に一八五日、計五〇五日分勤務している。神亀三年(七二六)山背国愛宕郡雲下里計帳(正倉院文書、『大日本古文書』一、三六四頁)には、「大初位下出雲臣安麻呂 年肆拾式歳 正丁 眉黒子 北宮帳内」とある。

103 墨と小刀を進上した際の木簡

(SD四七五〇出土。城21-8上)

(表) 進出炭十三古分數五籠小刀一針三持

(裏) 参出辛男 七月廿六日少書吏置始国足 家従「廣足」

長さ一八八mm・幅二四mm・厚さ四mm ○一型式

京外にあった、高市皇子の財産を継承する家政機関から長屋王邸に送られた文書木簡。五籠に分けて入れられた炭十三古と小刀一つと針三持を、辛男が長屋王邸に持ってきたことを記す。

104 大庭の所領からのカブラの送り状

(SD四七五〇出土。城21-9下)

大庭御蘭進上著菜六十束駄二匹 一馬各卅

長さ二七二mm・幅二八mm・厚さ二mm ○一型式

大庭御蘭（大阪府守口市大庭か）からのカブラ六十束の送り状。
馬二匹で三十束ずつ送られてきた。

105 石川夫人への米の支給木簡

（SD四七五〇出土。城28—44上（城21—14下））

○石川夫人所飯四升 受□刀自
十九日□○

長さ二四九mm・幅二四mm・厚さ三mm ○一型式

石川夫人に対して飯四升を支給した時の木簡。米は炊いて飯にすると二倍の容積になるという。石川夫人は『本朝皇胤紹運録』によると石川虫丸の娘で、長屋王との間に桑田王をもうけている。

106 子を生んだ犬への米の支給木簡

（SD四七五〇出土。城21—21下）

（表）子生犬一米一升受長麻呂○
（裏）十月十六日山麻呂○

長さ一九二mm・幅三四mm・厚さ四mm ○一型式

子を生んだ犬に対して米一升を支給した木簡。一升は現在の約四合、約〇・七リットル。この木簡により、長屋王邸で犬が飼われていたことが分かる。他の木簡には「御犬」や「若翁犬」との記述もあり、王子たちの飼いだもいたようだ。

107 木上司に所属する人々の勤務日数を記した木簡

（SD四七五〇出土。城25—28下（城21—28下））

（表）木上司等十一月日数進 新田部形見
忍海安万呂

日廿七 夕廿一 秦廣嶋 日廿 夕廿七
日廿 夕廿六

（裏）十一月廿日

長さ三四mm・幅三〇mm・厚さ九mm ○一型式

木上司（現在の橿原市付近にあった長屋王の所領の管理機関）に勤めていた人々の十一月の勤務日数を月末に連絡した木簡。貴族の家政機関は国から与えられるもので、役所と同様の勤務日数や作業状況などの管理が行われていた。木上は、長屋王の父高市皇子の死を悼む柿本人麻呂の挽歌（『万葉集』巻二、一九九—二〇一）にも登場する高市皇子ゆかりの長屋王家の所領で、糯米や焼米・竹などを長屋王邸に提供し、馬も管理していた。

108 意保御田からの瓜の送り状

（SD五一〇〇出土。城22—11上）

（表）従意保御田進上瓜一駄 負瓜員二百顆

（裏）越仕丁 天平八年七月廿三日国足

長さ二二〇mm・幅二七mm・厚さ三mm ○一型式

意保御田から瓜二百個を送ってきた時の木簡。馬に載せて仕丁が運んできた。木簡の廃棄場所から考えて、瓜の宛先は皇后宮であらう。意保御田は、現在の奈良県田原本付近にあったと考えられる。天平八年七月中旬から八月初頭まで、連日のように瓜を進上している。天平八年は七三六年。